

# 東洋文庫所蔵未比定サンスクリット写本について

堀 伸一郎

東洋文庫の所蔵するサンスクリット写本については、Kaneko et al. 1979によるカタログが公刊されている。同カタログ記載の写本には、未比定の写本が6点（No. 3-B, 9, 22, 23, 27, 28）含まれているが、このうちNo. 27（請求番号：SKT-MS-27）とNo. 28（請求番号：SKT-MS-28）の2点を比定できた。本稿では、両写本の書誌学的記述を行う。

## 1. 東洋文庫所蔵サンスクリット写本の来歴

Kaneko et al. 1979には、同カタログ記載写本の来歴に関して何の記述もない。No. 3-A（請求番号：SKT-MS-3A）*Saddharmapuṇḍarīka* に関しては、河口・池田 1926 により「先生 [河口慧海] が西藏國ツアン州シヤール、ゴンパ寺で得られたもの」（緒言）として写真版が出版され、SKT-MS-3A との一致が確認できる。さらに、河口慧海自身が入手の経緯を書き残しているため（河口2001: 108-111, 234-238）、河口がチベットから将来した写本と断定できる。

では、SKT-MS-3A 以外のサンスクリット写本も河口が入手し、東洋文庫に寄贈したのだろうか。個々のサンスクリット写本について、河口将来本であることを直接示す記録・書類は、東洋文庫内でも現時点で見つかっていない<sup>(1)</sup>。1940年に河口が、膨大なチベット語文献等を東洋文庫に寄贈したことは「図書原簿」で確認される。「図書原簿」に記載のある河口寄贈の諸文献のうち、以下の一連の3項目がサンスクリット写本である可能性がある。

法華經写本	1部1帙
諸写經	1部14帙
梵文法華經（写真版）	1部1帙

「図書原簿」には「紺紙金泥写本法華経 1部1帙」という項目でチベット語訳法華経写本<sup>(2)</sup>が記載されているので、それとは別項目の「法華経写本 1部1帙」が、サンスクリット写本 SKT-MS-3A を指す可能性がある。次の「諸写経 1部14帙」は、何語の写本なのか明記されていないが、サンスクリット写本を指しているのではないだろうか。チベット語写本カンギユルについては「写本経部 1部115帙」という別項目がある。「梵文法華経（写真版） 1部1帙」は、SKT-MS-3A の写真版である河口・池田 1926 を指すと考えて差し支えない。

壬生（1955: 1）は、「東洋文庫所蔵の河口寫本は十六部に過ぎない」と述べているが、16部という数は、上記の3項目を合わせた16帙に一致する。東洋文庫所蔵の河口将来サンスクリット写本が16部あることについては、壬生1955を引用しながら、河口正（1961: 173）、Enoki（1967: 42, n.159）でも言及される。

Kaneko et al. 1979には、No. 1～28の28点のサンスクリット写本が記載されているが、カタログ作成の過程で、それまで1帙として保管されていた写本が分割され、それぞれ別の番号を付与された可能性が十分ある。例えばNo. 21, 22, 23は、実見したところ同一のサイズ・行数・書体・筆跡で書かれているため、1帙をなしていても不思議はない。16点から28点に増加したとすればこのような事情が想定されるが、28点すべてが河口将来本であるという直接的証拠はどこにもない。

現存の東洋文庫所蔵サンスクリット写本を示唆するような記述を河口自身が書き残していれば、河口将来本である間接的な証拠となろう。本稿で扱う SKT-MS-28は、まさにその一例といえる。河口の「入蔵記」（河口1981: 35; Cf. 河口2000: 16）には次の記述がある。

予が、ネパールで入手した梵語の典籍は上掲の外に、二十九部の文学書類がある。すなわち梵語の字典であるところの、アマラコーシャとか、あるいはシツダヨーガというごときで、…

周知の通り、河口将来サンスクリット写本の大部分は、現在東京大学

総合図書館に所蔵され<sup>(3)</sup>、カタログ (Matsunami 1965) が公開されているが、同カタログに「シッダヨーガ」に対応する題名の写本は記載がない。ところが SKT-MS-28には、後述するように Vṛnda 著 *Siddhayoga* という医学文献が含まれているので、「入蔵記」で「シッダヨーガ」として言及される写本は、SKT-MS-28を指している可能性が高い。

「入蔵記」にはこの直後、河口が高楠順次郎・長谷部隆諦の協力のもとベナレスで、「二十九部の文学書類」を含むサンスクリット写本の目録を作成したとの記述がある。今後この目録が発見されれば、現在東洋文庫の所蔵するサンスクリット写本のうち、具体的にどれが河口将来写本なのかを推定する手がかりになるかもしれない。

さらに、SKT-MS-28の夾板の内側には和紙の短冊が添付されており、墨で「尼陀那」「古」「破損本」「梵書」「へろの一下」と記されている。庄司 (2010b: 37, 38; 2012: 28, 29, 41) によれば、河口旧蔵書には整理番号がよくみられ、例えば東洋文庫所蔵蔵外-333には「へほの三上」という番号を含む和紙が夾板に添付されている。したがって、同様の記号を含むこの短冊は、河口旧蔵書であることを示しており、SKT-MS-28が河口将来本であることの有力な証拠といえよう。

一方、SKT-MS-27については、河口将来を示す証拠が見つからない。

## 2. SKT-MS-27: *Vimalaprabhā*

Kaneko et al. (1979: 190) における本写本の記述は次のとおりである。

No. 27

- (1) Unidentified fragments
- (2) Palm leaf, terribly damaged.

すなわち、破損の著しい貝葉写本とするのみで、葉数・行数・サイズ・書体に関する記載がない。

本写本の書記媒体は、Kaneko et al. 1979に述べられるとおり、ヤシ

の葉（貝葉、palm leaf）であるが、サイズなどから *Corypha umbraculifera* L. という種の葉を加工したものと判断できる<sup>(4)</sup>。126葉が残っているが、全葉の左右両端が失われている。特に右端の破損が著しい。横方向の長さは、最大の葉で450mmであるが、破損がなければ520mm以上あったと推定される。上下端は破損のない葉もあり、縦方向の長さは最大で55mmである。55×520mmというサイズは、*Corypha umbraculifera* の葉を使用した貝葉写本としては標準的なものといってよい。

葉番号は、左余白または右余白に書かれていたものと考えられるが、全て失われている。したがって、葉の順序は、印刷本と内容を比較しながら推定する以外にない。全126葉を印刷本（Vp 1, 2, 3）対応テキストの順序に並べたものが、付表1・2である。以下では、各葉を特定するために、筆者が新たに設定した番号（表のA列）を用いることとする。

各葉の左右2カ所に綴じ穴があり、綴じ穴を中心として幅23-27mmのスペースが置かれ、各行を分断している。したがって、テキストは左・中央・右に3分割されているように見える。左側テキストの幅は最大で152mm、中央部テキストの幅は161-164mm、右側テキストは全葉で右端が失われているが最大で幅93mmである。

左・中央・右の各テキストの途中に細密画が描かれている葉が一部あり、中村（2007: 7-10）が図像の概要を記述している。図像もテキストを分断するため、図像を含む葉はテキストが6分割されているように見える。中村の触れる図像のうち、31C, 56L, 56C, 56R は見当たらない。図像用のスペースがあるにもかかわらず、図像を含まない葉が全部で11葉あるのは、描画作業が中断したためだろうか。全126葉を校訂テキストの順序に並び替えれば、図像用スペースを含む葉が章節の切れ目付近に2葉連続して見られることが判明する。しかも2葉のうち、前の葉は裏面、後の葉は表面に規則的に図像用スペースがある。つまり図像は、見開きになるように描かれているのである。図像についても、今回文献が判明したことから、テキスト内容との関係など更なる解明が期待される。

18v に描かれる3点の図像（中村論文では37L, 37C, 37R）の下には、チベット文字 dbu med 字体で次のチベット語が書かれている。

左 chos kyi gzuñ | yid bzin gyi nor bu |  
中 dus 'khor lhan skyes  
右 chos kyi duñ |

それぞれの語の意味は各図像と一致しているが、いつ誰がこのチベット語を書き込んだのかは不明である。

第1葉以外は、表裏各6行で書かれているが、表裏各7行の葉が唯一存在する(88rv)。第1葉は、裏面のみ6行で書かれている。全葉の片面には半透明の紙<sup>(5)</sup>が貼られている。これは補強を目的としたものと思われるが、この処置がいつ誰の手によって行われたのかは不明である。紙は写本の表裏と全く無関係に貼られているが、貼られていない面に比べテキストの解読が困難である。別の葉に属す断片が混入して貼ってあることがあり、解読の際には注意を要する。まとまった126葉のほか、断片が多数存在し、マイクロフィルム用の円形スチール缶の中にまとめられている。

書体は古いベンガル文字<sup>(6)</sup>である。文字は筆を使いインクで書かれている。上下の余白に、様々な時代のネパール文字による書入れが散見されるため(2r, 39r, 46r, 53r, 57vなど)、もともとベンガルもしくはミティラー地方で作成された後、ネパールにもたらされ伝承されたものと推定される。

写本の内容は、密教経典 *Kālacakrantra* の注釈文献で、Puṇḍarīka に帰せられる *Vimalaprabhā*<sup>(7)</sup> (以下 Vp; 詳しくは *Mūlatantrānusāriṇī Dvādaśasāhasrikā Laghukālacakrantrarājaṅgikā Vimalaprabhā*<sup>(8)</sup>) である。注釈のみで *Kālacakrantra* の詩節を含まない部分と、詩節のみで注釈を含まない部分の両方がある<sup>(9)</sup>。注釈のみの部分は、1葉を除き Vp 1すなわち第1・2章の範囲に対応する。1葉のみ Vp 2.7.13-2.9.8 (第3章)に対応する。*Kālacakrantra* の詩節のみを含む部分は、2葉が第1章、2葉が第2章、11葉が第3章、14葉が第4章、12葉が第5章、2葉がそれぞれ第3章末から第4章、第4章末から第5章に対応する。詩節末には詩節番号が十進記数法で書かれる。注釈部分の場合は、注釈される詩節の番号が注釈末尾に付される。

失われた葉も多数あると考えられるため、本写本が第4・5章の注釈をもともと含んでいたのかどうかは不明である。

章末コロフォンは以下の各葉（いずれも注釈のみを含む部分）に見られる。

- 6r3    iti śrīmūlatantrānusāriṇyāṃ dvādaśasāhasrikāyāṃ laghu-  
    kālacakra○tantrarājaṭīkāyāṃ vimalaprabhāyāṃ sakalamāravi-  
    ghnavināśataḥ parameṣṭadevatāsanmārgganiyamodde○  
13v5    /// [st]. ntradeśanoddeśo dvitīyāḥ ||
- 18v3    iti mūlatantrānusāriṇyāṃ laghu○kālacakratatraṭīkāyāṃ  
    dvādaśa□sāhasrikāyāṃ vimalaprabhāyāṃ deśakā○dhyeṣaka-  
    mūlatantralaghutantrasandha□  
29v1    iti mūlatantrānusāriṇyāṃ laghu○kālacakratantrarāja-  
    ṭīkāyāṃ vima□laprabhāyāṃ dvādaśasāhasrikāyāṃ ○ sekādi-  
    saṃgrahoddeśa + pañca  
33v5    /// .[āyā] .. ... .[ā]hasrikā□yāṃ vimalaprabhāyāṃ  
    maṅḍalābhīṣe○kādisagrahoddeśaḥ ṣaṣṭhaḥ ||
- 60v3    /// yāṃ vimalaprabhāyāṃ [jy]otirjñānavidhimahodde-  
    śaḥ ||
- 73r1    iti mūlatantrā□nusāriṇyāṃ laghukālacakrata○ntrarāja-  
    ṭīkāyāṃ dvādaśasāha□  
79v1    iti mūlatantrānusāri○ṇyāṃ dvādaśasāhasrikāyāṃ laghu-  
    □kālacakratantrarājaṭīkāyāṃ

ポストコロフォンは失われているため、書写年代などの詳細は不明であるが、書体から判断すれば少なくとも近代の写本ではないことが確実である。

本写本は、破損が著しく失われた葉も少なくないため扱いにくいものではあるが、従来の校訂本（Vp 1, 2, 3）では参照されていないので、今後 Vp や *Kālacakratatra* の本文研究で活用されることが期待される。

3. SKT-MS-28: Mādhava 著 *Rugviniścaya* および Vṛnda 著 *Siddhayoga* を中心とする医学文献

Kaneko et al. (1979: 190) における本写本の記述は次のとおりである。

No. 28

- (1) Unidentified text
- (2) Paper, terribly damaged.

つまり、破損の著しい紙写本とするのみである。

本写本の書記媒体は、2層からなる薄茶色の紙<sup>(10)</sup>である。第1～5葉は2層が剥がれ2枚に分離している。第6～8葉と第11葉は2層が剥がれかけている。全葉の左端が破損している<sup>(11)</sup>ため、行頭の akṣara (音節) がいくつか失われている。第277葉から最終葉までの右余白、上下余白を中心に虫食い跡が観察できる。右端から30mmほどの位置に赤い二重縦罫線が引かれる。一部の葉の左端にも同様の赤い二重線の痕跡が見られる。テキストは左右の罫線の間書かれている。第6葉の場合、左右の罫線間が226mm、右罫線から右端までが30mmなので、左端にも同じ長さの余白があったとすれば、1葉のもともとの横の長さは286mmと推定される。第6葉の縦の長さは83mmである。

葉番号は、十進記数法で裏面の右余白に書かれている。葉番号のある第1～299葉に欠葉はない。第299葉の後に、葉番号のない2葉がある。この2葉を便宜的に第300・301葉とする。第1葉の前にも1葉あるが、テキストは含まない。よって、テキストの書かれた葉は全301葉である。

第1葉表面(1r)から第123葉裏面(123v)までの行数は8行で一定であるが、124rが9行となり、以後の葉は7～9行で一定しない。281vと299rが10行、299vが11行書かれている。葉番号のない300rは8行、300vは3行、301rは3行で、301vにはテキストが書かれていない。

右端から157mmの位置に綴じ穴の中心があり、綴じ紐も残っている。綴じ穴の周囲に長方形のスペースがあり、全8行の場合、第3～6行が

綴じ穴スペースによって分かたれることが多い。

第265葉、第277葉の2葉には紐が巻かれている。葉のような機能があるのだろう。後述するように、265r8からは *Rugviniścaya* でも *Siddhayoga* でもない *Kumāraṅtra* という文献が始まる。

本写本は皮革様のカバー2枚に挟まれている。カバーは表が茶色く裏が白い。裏に毛のようなものが見えるので獣皮で作られているのかもしれない。さらに、2枚の夾板も残っており、最終葉に近い方の板は二つに割れている。割れた板のサイズは85×288mm、もう一方の板は84×288mmである。割れた板の表面に、横書きのデーヴァナーガリー文字で *निदान*、縦書きの漢字で「尼陀那」と墨で書かれている。これを書いたのは河口慧海かもしれない。

書体はネパール文字 (*Nepālākṣara*)<sup>(12)</sup>である。文字は筆を使いインクで書かれている。筆跡から判断して、少なくとも3名の筆写者を区別できる。1r-119r2の筆跡は比較的太いが、119r2の途中、章末コロフォンの後で比較的細い筆跡に変わる。ここから書写を開始した第2の筆写者は、3箇所のコロフォンの後、自分の名前を記している。

138v8 liṣita[ṛṃ] kṛṣṇadevavaidyasyeti ||

293r9 lipiḥ kṛṣṇadevasyedam\* ||

299v11 lipiḥ kṛṣṇadevavaidyasya ||

第2の筆写者が、*Kṛṣṇadeva*(*vaidya*) という名の医師 (*vaidya*) であることが判明する。第129葉は表面と裏面で筆跡が異なる。129vは、おそらく第3の筆写者によるものと思われる。このほか、142r5, 163v8-164r1, 165v4 (章末コロフォンの後；図2参照) で、筆跡の明らかな変化が観察できる。葉番号のない300rv と301r はそれぞれ、さらに別の筆跡と思われる。

単語の切れ目にあたる *akṣara* の右肩には、赤あるいは黒の短い縦線が書かれていることが多い。章末コロフォンや見出しなどは薄い赤色でマーキングしてあることが多い。上下の余白には書入れが散見される。

葉番号の記された最終葉の最終行299v11には、前述の *Kṛṣṇadevavaidya*



による記名の後、次のように年月が記される。

299v11 samvata 784 caitre māsi śuklapakṣe śubhadine ||  
śubhaṃ ||  
(784年、チャイトラ月、自分の、良い日に。幸あれ。)

784という年号はネワール暦によるものと考えられる。この年号が満年数<sup>(13)</sup>であるとすれば、チャイトラ月の白分（朔から望までの半月）は、グレゴリオ暦1664年3月28日金曜日から同年4月10日木曜日までの期間に相当する<sup>(14)</sup>。残念ながら、tithi や曜日などが記されていないため日付までは確定できない。

写本の内容は、Mādhava 著 *Rugviniścaya* および Vṛnda 著 *Siddhayoga* という両医学文献の対応章が続くよう、交互に書写されている。基本的にはこの2文献を中心に構成されているが、どちらの文献にも見られない章やテキストも含まれる。

写本の冒頭は、次のように Mādhava 著 *Rugviniścaya*<sup>(15)</sup> (以下 Rv) で始まる。

1r1 /// [na]maḥ śivāyaḥ || praṇamya jagadutpatti,sthitisamḥā-  
rakāraḥ, | svarggāpavarggayor=dvāraṃ, trailokyaśaraṇaṃ śi-  
vaṃ, || nānāmunināṃ va[ca]  
1r2 /// + + .. nīṃ samāsataḥ sadbhiṣajāṃ niyogāt\*, | sopadra-  
vāriṣṭānidānālīṅgo | nibadhyate rogaviniścayo 'yaṃ, || nānātantra-  
vih[i]n[ā]

1r2に見える *rogaviniścaya* は Rv の別名の一つである。Rv には、他に *Gadaviniścaya*, *Mādhavanidāna* という別名<sup>(16)</sup>、最後の別名を略した *Nidāna* という略称もある。*Nidāna* という題名は、前述のとおり夾板の表面にデーヴァナーガリー文字と漢字音訳で書かれている<sup>(17)</sup>。

本文献の題名を含んだ章末コロフォンは、4例が見出される。

146r8 [i]ti rugviniścaye, galagaṇḍa,gandamālā,granthyārbuda,  
apacī,nidānam\* ||

165v4 iti rugviniścaye bhagandaranidānaṃ ||

261r6 iti rugviniścaye bālaroganidānaṃ ||

271r3 iti rugviniścaye viṣanidānaṃ ||

4 例目の章末コロフォンの前に Rv の最終章最終詩節 (69.65) が書かれ、ここで Rv の本文は終了する。この後は Vṛnda 著 *Siddhayoga*<sup>(18)</sup> (以下 Sy) の第68章以下が書かれる。

Sy の本文は、次のように Rv 第2章 (*jvaranidāna*) 末コロフォンの後開始する。

5v8 /// || iti jvaranidānam\* || || om̐ namaḥ śivāya || dhyātvā śivaṃ  
paramatatvavicāavedyaṃ, caṇḍīm=abhīṣṭaphaladāṃ saḡaṇaṃ  
gaṇe

6r1 /// [śa]nr̥ | dhanvantariṃ munivaraṃ munisuśrutādī,n=ātre-  
yam=ugratapasam̐ manasā praṇamya || nānāma[ta]prathitadr̥ṣṭa-  
phalaprयोगaiḥ, prastāvavā

6r2 /// [kya]sahitai,r=iha siddhayogaḥ | vṛndena mandamati[n]-  
ātmahitārthanāya, saṃlikhyate gadaviniścayajakrameṇa || rogam=  
ādau parīkṣyeta, ta

6r2に *siddhayoga* という題名、著者名の vṛnda が見える。さらに、*gadaviniścayajakrameṇa* 「*Gadaviniścaya* (= *Rugviniścaya*) 由来の順序に沿って」著述することが明記される。

299v10-11に、*siddhayoga* という題名を含む Sy 最終章最終詩節が書かれ、前述の筆写者名、年月を含むポストコロフォンに続く (図2参照)。

299v10 /// + + + ṇair=yuktaṃ bhiṣakmataṃ || || iti vividhamu-  
nīnām̐ vākyaṃ=ālokya yatnāt=svamatiparimitair=vvā khyātisad-  
bhiḥ prayogaiḥ | grathita iha mayāyaṃ saṃgraho

299v11 /// + + + mnā, sa[padi] sa ca liṣṭvā siddhayogaḥ sa-  
māptaḥ ||

本写本には、Rv, Sy 以外の医学文献が関連箇所で見られることがあ  
る。Sy 第67章 *bālagrahādhikāra* という小児科関連の章の終わりには、  
Rāvaṇa に帰せられる *Kumāra Tantra*<sup>(19)</sup> (以下 Kt) という、子供を苦し  
める悪鬼を鎮める方法を記述した文献が書かれている。開始と終了は次  
のとおりである。

265r8 atha bālagrahaḥ ||

268v1 iti rāvaṇakṛtaṃ bālatamtraṃ || || iti bālarogādhikāraḥ ||

題名が *Kumāra Tantra* ではなく *bālatamtraṃ* となっている点が注目さ  
れる。Rāvaṇa に帰せられる *Bāla Tantra* という文献は、Meulenbeld  
(2000a: 145; 2000b: 165, n.606) によれば Kt とは全く異なる文献のよう  
である。しかし、本写本の本文を Kt 印刷本 (pp.4-11) と比較すると、  
脱字や異読があるがほぼ一致する。

153v3で Sy 第43章 (*vidradhyadhikāra*) が終了した後、*stanavidradhini-  
dāna* という2詩節からなる章が見られる。この2詩節は Rv にはない  
が、Trimallabhaṭṭa 著 *Bṛhadṛyogatarāṅgīnī*<sup>(20)</sup> (以下 By) 第110章 (110.  
28-29; p.727) に含まれている。この後 (153v5) は、Rv 第41章 (*śoṭha-  
nidāna*) が続く。

Kt, By 以外にも、本写本には Rv にも Sy にも対応しないテキスト  
が一部に見られるため、今後なお検討を要する。

本写本は、Rv と Sy を中心としながら、テーマに応じて他文献をも  
組み込みながら実用目的で作成された写本ではないかと推察される。17  
世紀半ば、医師 Kṛṣṇadeva をはじめとする複数の人々が書写した後、  
カトマンドゥ盆地において数世代の医師に受け継がれながら、実際に医  
療の場で用いられたのではなからうか。ところが、あるとき鼠が左端を  
齧り破損して使えなくなったため、20世紀に入りネパールでサンスクリッ  
ト写本を渉猟する日本人、河口慧海に譲渡されたのではないかと想像さ

れる。今後は、インド伝統医学の研究のために活用が期待される。

サンスクリット写本のラテン文字転写に使用した記号

( )	復元された akṣara
[ ]	破損した akṣara または不確かな読み
+	失われた akṣara
..	判読できない akṣara
.	判読できないか失われた、akṣara の一部
=	akṣara の分解
///	写本の破れ目
*	virāma
’	写本にある avagraha
	daṇḍa
	二重 daṇḍa
,	写本にある句読点
○	綴じ穴スペース
□	図像用スペース
r	recto (表面)
v	verso (裏面)

参考文献および略号

By = Hanumanta Pādhye Śāstrī, ed. *Trimallabhaṭṭaviracitā Bṛhadhyogata-raṅginī*. dvitīyo bhāgaḥ (Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ 71). Poona: Ānandāśramamudraṅālaya, 1914.

Dimitrov, Dragomir. 2002. “Tables of the Old Bengali Script (on the Basis of a Nepalese Manuscript of Daṇḍin’s *Kāvyādarśa*).” In: Dragomir Dimitrov, Ulrike Roesler and Roland Steiner, eds. *Śikhisamuccayaḥ: Indian and Tibetan Studies* (Collectanea Marpurgensia Indologica et Tibetologica) (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 53). Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien. 27-78.

- Enoki, Kazuo. 1967. "Dr. G. E. Morrison and the Toyo Bunko. In Celebration of the Fiftieth Anniversary of the Transfer of Dr. G. E. Morrison Library to Baron Hisaya Iwasaki (1917-1967)." *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 25: 1-57.
- Hoernle, A. F. Rudolf. 1900. "An Epigraphical Note on Palm-leaf, Paper and Birch-bark." *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 69, Part I, No. 2: 93-134.
- Kaneko, Ryōtai, and Yoshihiro Matsunami with the collaboration of Kōjun Saitō. 1979. "A Descriptive Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Toyo Bunko." *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 37: 159-191.
- Kielhorn, Franz. 1888. "The Epoch of the Newar Era." *The Indian Antiquary* 17: 246-253. Reprinted in: Wilhelm Rau, ed. *Franz Kielhorn. Kleine Schriften mit einer Auswahl der epigraphischen Aufsätze*. Teil 1 (Glasenapp-Stiftung, Band 3, 1). Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1969. 456-463.
- Kt=Filliozat, Jean. *Le Kumāratāntra de Rāvaṇa et les textes parallèles indiens, tibétains, chinois, cambodgien et arabe* (Cahiers de la Société Asiatique 4; Étude de démonologie indienne). Paris: Imprimerie nationale, 1937. 4-11.
- Lienhard, Siegfried. 1988. *Nepalese Manuscripts. Part I: Nevārī and Sanskrit, Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Berlin*, described by Siegfried Lienhard, with the collaboration of Thakur Lal Manandhar (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Band 33.1). Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden.
- Matsunami, Seiren. 1965. *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.
- Meulenbeld, G. Jan. 1974. *The Mādhavanidāna and Its Chief Commentary. Chapters 1-10. Introduction, Translation and Notes* (Orientalia Rheno-Traiectina 19). Leiden: E. J. Brill.
- 2000a. *A History of Indian Medical Literature*. Volume II A: Text

- (Groningen Oriental Studies, Vol. XV / II A). Groningen: Egbert Forsten.
- 2000b. *A History of Indian Medical Literature*. Volume II B: Annotation (Groningen Oriental Studies, Vol. XV / II B). Groningen: Egbert Forsten.
- Rājvaṃśī, Śaṅkarmān. 1960. *Prācīna lipi varṇamālā* (Purātattva prakāśana mālā 3). Nepal: Śrī 5 ko sarkār, purātattva ra saṃskṛti vibhāg, nepāl.
- Rv = Vaidya Jādvajī Tricumjī Āchārya, ed. *Mādhavanidāna by Mādhavakara, with the Commentary Madhukośa by Vijayarakṣita & Śrīkaṅṭhadatta and with Extracts from Atankadarpaṇa by Vāchaspati Vaidya*. 5th edition. Bombay: Nirnaya Sagar Press, 1955.
- Sy = Premvati Tewari and Asha Kumari, eds. and trs. *The First Treatise of Āyurveda on Treatment: Vṛndamādhava or Siddha Yoga* (Haridas Ayurveda Series 18). 2 parts. Varanasi: Chaukhambha Visvabharati, 2006.
- Trier, Jesper. 1972. *Ancient Paper of Nepal: Results of Ethno-Technological Field Work on Its Manufacture, Uses and History — with Technical Analyses of Bast, Paper and Manuscripts* (Jutland Archaeological Society Publications 10). Copenhagen: Gyldendal.
- Vp 1 = Jagannatha Upadhyaya, ed. *Vimalaprabhāṭikā of Kalki Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakratantrarāja by Śrī Mañjuśrīyaśa*. Vol. I (Bibliotheca Indo-Tibetica Series 11). Sarnath / Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1986.
- Vp 2 = Samdhong Rinpoche, Vrajavallabh Dwivedi and S. S. Bahulkar, eds. *Vimalaprabhāṭikā of Kalki Śrīpuṇḍarīka on Śrīlaghukālacakratantrarāja by Śrīmañjuśrīyaśas*. Vol. II (Rare Buddhist Texts Series 12). Sarnath / Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1994.
- Vp 3 = Samdhong Rinpoche, Vrajavallabh Dwivedi and S. S. Bahulkar, eds. *Vimalaprabhāṭikā of Kalki Śrīpuṇḍarīka on Śrīlaghukālacakratan-*

*trārāja* by Śrīmañjuśrīyaśas. Vol. III (Rare Buddhist Texts Series 13).  
Sarnath / Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies,  
1994.

Yano, Michio and Makoto Fushimi. *Pancanga*. Vers. 3.13. Feb. 2004  
(<http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~yanom/pancanga/>).

石井溥2001 「ネワール文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』東京：三省堂. 712-718.

河口正1961 『河口慧海：日本最初のチベット入国者』東京：春秋社.

河口慧海・池田澄達編1926 『梵文法華經』東京：佛教宣揚會.『西藏旅行繪巻・西藏品圖録 美術資料・梵文法華經』（河口慧海著作集 別巻2）新潟県出雲崎町：うしお書店, 2001に収録.

河口慧海1981 『第二回チベット旅行記』（講談社学術文庫317）東京：講談社.

—————2000 「入蔵記」『印度歌劇シヤクンタラー姫 入蔵記・雪山歌旅行』（河口慧海著作集 第14巻）新潟県出雲崎町：うしお書店.

—————2001 『論集Ⅰ』（河口慧海著作集 第15巻）新潟県出雲崎町：うしお書店.

庄司史生2010 a 「河口慧海請来文献」立正大学大崎図書館編『今昔蔵書選～遠いときへ思いを馳せて～』東京：立正大学大崎図書館. 14-17.

—————2010b 「旅する本～立正大学図書館所蔵河口慧海コレクション～」立正大学大崎図書館編『今昔蔵書選～遠いときへ思いを馳せて～』東京：立正大学大崎図書館. 36-38.

—————2012 「東洋文庫所蔵・河口慧海将来蔵外写本チベット語訳『金剛般若経』と『法華経』について」『東洋文庫書報』43：19-42.

塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著1989 『梵語仏典の研究Ⅳ 密教經典篇』京都：平楽寺書店.

津田眞一1977 「時輪タントラ」水野弘元・中村元・平川彰・玉城康四

郎編『仏典解題事典』第2版. 東京：春秋社. 368-369.  
中村菊之進2007 「東洋文庫所蔵梵文写本に所載の挿画」『東洋文庫書報』  
38：1-18.  
壬生台舜1955 「河口コレクションに就いて」『日本西藏學會々報』2：1-3.

注

- (1) 東洋文庫の篠崎陽子氏のご教示による。同氏には「図書原簿」の記載内容についてもご教示いただいた。
- (2) 庄司2012参照。
- (3) 東京大学・東洋文庫のほか、近年、立正大学情報メディアセンター大崎図書館でも河口将来サンスクリット写本の所蔵が確認された。庄司(2010 a, 2010 b) 参照。
- (4) *Corypha umbraculifera* の葉を加工して作られた貝葉写本の物理的特徴については、Hoernle (1900: 94-97) 参照。
- (5) 中村 (2007: 4) は雁皮紙とする。
- (6) 古いベンガル文字 (old Bengali script) については、Dimitrov 2002 参照。
- (7) *Kālacakrantra* と *Vimalaprabhā* のサンスクリット写本等に関しては、塚本ほか (1989: 336-338) 参照。*Kālacakrantra* と *Vimalaprabhā* の解題は、津田1977参照。
- (8) 本写本の章末コロフォンでは、*Dvādasasāhasrikā-* の位置が、*Mūlatantrā-musāriṇī-* の後 (6r3, 79v1)、*Laghukālacakrantra(rāja)ṭikā-* の後 (18v3, 73r1)、*Vimalaprabhā-* の後 (29v1) の3通りあり、一定しない。
- (9) Vp 1 (p.xxix) によれば、校訂本で使用された写本にも、注釈のみの部分や詩節のみの部分が見られる。
- (10) ネパール写本で用いられる紙に関しては、Trier 1972に詳しい。
- (11) 中村 (2007: 4) は「全葉左端に鼠害？」とする。
- (12) この名称については、Lienhard (1988: xviii) 参照。同じ書体をネワール (Nevārī / Newārī) 文字と呼ぶこともある (Rājvaṃśī 1960: 1-7)。石井2001では「狭義のネワール文字」。
- (13) ネワール暦の年号は通常、数え年ではなく満年数である。ネワール暦に



については、Kielhorn 1888参照。

- (14) *Sūryasiddhānta* に基づくインド暦西暦換算ソフトウェア、Yano & Fushimi, *Pancanga* Version 3.13による。
- (15) 著者 Mādhava や著書 *Rugviniścaya* については、Meulenbeld (1973: 1-27; 2000a: 61-77) 参照。
- (16) Meulenbeld (2000a: 61; 2000b: 74, n.4) 参照。
- (17) 中村 (2007: 4) は、SKT-MS-28について「未同定断片 [尼陀那ニダーナ、戒律の因縁・広解]」とし、「ネパールにおける律典の伝世は稀少」と記しているが、本写本は仏教文献ではない。題名の *Nidāna* は、仏教文献の一ジャンルとしての *nidāna* とは関係なく、医学用語で「病因」「病理」という意味である。
- (18) *Vṛndamādhava* という別名もある。著者 Vṛnda や著書 *Siddhayoga* については、Meulenbeld (2000a: 78-85) 参照。
- (19) 著者 Rāvaṇa や著書 *Kumāratantra* については、Meulenbeld (2000a: 143-145) および Kt を参照。
- (20) 著者 Trimallabhaṭṭa や著書 *Bṛhadhyogatarāṅginī* については、Meulenbeld (2000a: 316-325) 参照。

(国際仏教学大学院大学国際仏教学研究所)

付表

SKT-MS-27 *Vimalaprabhā* 写本の内容

表1 注釈のみを含む葉の内容一覧

- A. Vp 1対応テキストの順番。第40葉までは欠葉がないので、実際の葉番号と一致するはずである。
- B. 紙の貼られた面。
- C. 中村2007で用いられた、図像付の葉の番号、または図像用スペース(□)。
- D. 図像用スペースを含む面。
- E. 章末コロフォンを含む行。
- F. Vp 1対応テキストの開始箇所。
- G. Vp 1対応テキストの終了箇所。

A	B	C	D	E	F	G
1	r	N4	v		1.1.2	1.2.2
2	v	N38	r		1.2.5	1.4.5
3	v				1.4.7	1.6.17
4	v				1.6.19	1.9.6
5	v				1.9.8	1.11.8
6	r	N8	v	r3	1.11.9	1.12.24
7	v	N67	r		1.12.25	1.14.2
8	r				1.14.3	1.15.14
9	r				1.15.15	1.17.4
10	r				1.17.5	1.18.14
11	v				1.18.16	1.19.28
12	r				1.20.1	1.21.17
13	r	N71	v	v5	1.21.19	1.22.25
14	v	N70	r		1.22.25	1.24.1
15	r				1.24.2	1.26.3
16	v				1.26.5	1.27.18
17	v				1.27.19	1.29.7
18	r	N37	v	v3	1.29.7	1.30.17
19	v	N40	r		1.30.18	1.31.25

20	r				1.31.25	1.33.16
21	v				1.33.20	1.35.9
22	v				1.35.11	1.37.8
23	v				1.37.9	1.38.29
24	r				1.39.2	1.40.17
25	r	N61	v		1.40.19	1.41.22
26	v	N68	r		1.41.23	1.43.9
27	v				1.43.10	1.44.24
28	v				1.44.25	1.46.4
29	r	N1	v	v1	1.46.6	1.47.14
30	v	N3	r		1.47.14	1.48.19
31	r				1.48.20	1.49.31
32	v				1.50.1	1.51.12
33	r	N36	v	v5	1.51.13	1.52.19
34	v	N39	r		1.52.20	1.54.6
35	r				1.54.7	1.55.23
36	v				1.55.24	1.57.25
37	v				1.57.26	1.59.18
38	v				1.59.18	1.60.28
39	v				1.60.29	1.62.8
40	r				1.62.9	1.63.31
おそらく1葉欠ける						
41	v	N2	r		1.65.21	1.67.3
42	v				1.67.5	1.68.24
43	v				1.68.25	1.70.15
44	r				1.70.16	1.72.7
45	v				1.72.8	1.74.6
3葉程度欠ける						
46	v				1.78.27	1.80.20
4葉程度欠ける						
47	r				1.86.16	1.88.11
おそらく1葉欠ける						
48	v				1.90.21	1.92.17
2葉程度欠ける						
49	r				1.96.24	1.98.17
50	r				1.98.19	1.100.6
51	v				1.100.7	1.101.27
52	v				1.102.2	1.103.24

おそらく1葉欠ける						
53	v				1.105.18	1.107.14
54	r				1.107.16	1.109.11
55	r				1.109.12	1.111.10
56	v				1.111.11	1.113.18
57	r				1.113.20	1.116.1
58	r				1.116.2	1.118.17
59	v				1.118.17	1.121.14
60	v			v3	1.121.16	1.124.14
61	r	N66	v		1.124.16	1.126.24
おそらく1葉欠ける						
62	r				1.129.1	1.130.26
おそらく1葉欠ける						
63	v				1.133.16	1.135.17
64	v				1.135.18	1.138.17
多数葉欠ける						
65	v				1.148.14	1.150.17
おそらく1葉欠ける						
66	v	N69	r		1.152.23	1.158.15
67	v				1.158.15	1.160.21
68	r				1.160.22	1.162.29
69	r				1.162.30	1.164.25
70	r				1.164.25	1.166.25
71	r				1.166.26	1.168.18
72	r	□	v		1.168.19	1.170.6
73	r	□	r	r1	1.170.6	1.171.22
74	v				1.171.23	1.173.10
75	r				1.173.12	1.175.4
76	r				1.175.6	1.177.1
おそらく1葉欠ける						
77	v				1.178.21	1.180.16
78	v				1.180.18	1.182.8
79	v	□	v	v1	1.182.14	1.184.4
80	v	□	r		1.184.6	1.185.17
多数葉欠ける						
81	v	N31?			2.7.13	2.9.8

81番は、中村（2007: 8）が第31葉として図像を記述するが、図像もスペースもない。

表2 詩節のみを含む葉の内容一覧

- A. *Kālacakratāntra* 詩節の順番。注釈のみの葉に続く82番から開始。  
 B. 紙の貼られた面。  
 C. 図像用スペース (□)。  
 D. 図像用スペースを含む面。  
 E. 章末コロフォンを含む行。  
 F. 各葉に含まれる *Kālacakratāntra* 詩節の範囲。詩節番号は Vp 1, 2, 3 に基づく。

A	B	C	D	E	F
82	r				1.121b-136a
83	v				1.136b-150d
おそらく2葉欠ける					
84	v	□	r		2.7c-19c
多数葉欠ける					
85	r	□	v		2.162c-175a
おそらく3葉欠ける					
86	v				3.38b-53b
87	v				3.53c-69a
88	r				3.69b-87a
89	r				3.87d-101d
90	v				3.101d-114c
91	v				3.115a-127d
92	v				3.128b-141a
93	r				3.141b-154d
94	v				3.155a-168c
95	v				3.168d-182c
96	r				3.182d-195d
97	r	□	v		3.196a-4.3d
98	v	□	r		4.4a-15a
99	v				4.15d-29a
100	v				4.29b-42c
101	v				4.43a-56c
102	r				4.57a-70b
103	r				4.70c-83d
104	v				4.84a-97d

105	r				4.98a-111b
106	v				4.111d-125b
107	v				4.126a-139d
108	r				4.140b-154a
109	v				4.154c-168b
110	r				4.168d-182a
おそらく 2 葉欠ける					
111	r				4.210d-227a
112	r	<input type="checkbox"/>	v		4.227c-5.4d
113	r	<input type="checkbox"/>	r		5.5a-15b
114	r				5.15d-27d
115	r				5.28c-40d
116	v				5.41c-54c
おそらく 1 葉欠ける					
117	r				5.68b-81d
118	r				5.82a-95b
119	v				5.95c-108c
120	v				5.109a-121d
121	v				5.122b-135c
122	v				5.136a-149b
123	v				5.149c-162d
124	v				5.163a-175d
おそらく 4 葉欠ける					
125	v				5.229c-242d
126	v	<input type="checkbox"/>	v		5.243b-254b

112番は、中村（2007: 9）が第56葉として図像を記述するが、図像用スペースしかない。



